

烈火の剣

～ 信念を握りし掌 ～

CONTENTS

序章 旅立ち	3
剣と拳	6
現れた脅威	58
手折れなき信念	89
絶剣	131
終章 未来に向かう歩み	200

登場人物紹介

中位騎士・モミジ

姉・カエデと共に戦うことを夢見て花騎士となった少女。努力を重ねた結果世界花の加護は『進化』へと至っている。『一番の花騎士』とは何かを見つける事と、『開花』へ至ることができない自分の力に悩み、武者修行の旅を始めた。得物は大剣・爆葉刃。であり、騎士学校で学んだ剣術をベースに、剣の燃烧・爆発機構を活かした不退転の接近戦を得意とする。

中位騎士・サポテン

ブロッサムヒル王国直属騎士団・セントフローレス、所属の花騎士。モミジとは同期であり、友人の間柄。モミジと共に修行の旅に出る。寡黙な印象とは裏腹に熱く烈しい拳の持ち主であり、我流の体術で害虫を圧倒するほど。加護は『進化』の段階だが、『開花』に至ろうとしている過渡期に位置している。

桃源郷自警団所属・ナデシコ

ベルガモットバレー北東部に位置する自治区・桃源郷、で剣術師範を務める少女。天稟の才と、『開花』の加護を持ち、各国の騎士団からもその類まれな強さに一目置かれている剣客。対害虫剣術・愛染一刀流、の使い手でありながら、その他の・愛染流、を自警団の団員たちに教える師範でもある。

桃源郷自警団所属・オトギリソウ

ナデシコと同じく・桃源郷、に住む少女。ナデシコの親友でありナデシコが自警団員に伝授している・愛染流、の一派の使い手。非常に目立つ黄色の忍装束を身に着けている。

上位騎士・メイゲツカエデ

モミジの姉・カエデに命を救われて花騎士となった少女。大人びた印象を持つ容姿はカエデに瓜二つで、モミジでさえ見紛うほど。高い指揮のセンスを持ち、セントフローレス、の名将と評されている。本人の戦闘力も上位騎士クラスであり、世界花から採れた葉を加工して作られた葉団扇を得物とする。

序章 旅立ち

「本当に、行くというの。モミジさん」

背中から呼びかけられる、自らを案じる声。

不安を含んだその響きは周りの木々の音がざわめく中、まっすぐに届いてきた。

「……はい。決めたことです、メイゲツさん」

桜舞い散るプロツサムヒル首都外縁部にある門の前で、赤銅色の鎧と灼熱の炎のように紅いマフラーをまとった少女、モミジが振り向いた。モミジは、友であるメイゲツカエデの瞳を見つめ返す。

モミジは自らの決意をありのままに口にした。子供の頃から胸の中で描いてきた、「一番の花騎士^{フラワーナイト}」。それを目指すためにモミジは、彼女とともに戦うことができた騎士団を今日、出る。

「でも、たった二人でなんて……」

彼女が自分を心配する気持ちはわかる。しかしそれでも、この歩みを止める気にはならなかった。メイゲツカエデは本当に自分のことを心配してくれているな、とモミジは思った。

祖国リリウッドで騎士学校を卒業し、隣国プロツサムヒル最大の騎士団、セントフロレス^{レス}に配属を命じられたモミジは、彼女と出会った。

親友となった彼女がここまで心配してくれることを嬉しく思わないわけがない。

「大丈夫ですよ、一人じゃないです。私と……サボテンさんなら、問題ありません。何かあってもお手紙を送りますし、一生会えないわけじゃない。それに……この子もいますから」

モミジは旅路をともにする少女の名を挙げつつ、背中に背負う己の相棒——身の丈ほどもある大剣の柄に触れてメイゲツカエデに返す。

——そう、私には力がある。

幼い頃から自分より先に花騎士フラワーナイトとなった姉にあこがれたモミジは、自らも花騎士フラワーナイトとなつてから今日まで戦い続けた。

騎士学校では主席を取り、今離れようとしているセントフロレスセントフロレスでも、何度も優秀と評されている。

しかし、他人の尺度で見積もられても、当のモミジは己の強さに納得できなかった。加えて、何を以つて自らを優れた花騎士フラワーナイトとするのかさえ、分からなかった。

この旅は、それを見つげるためのもの。自分が目指す『一番』を探すための旅だ。

「私は……知りたいんです。この世界を旅して……もっといろんな事を見て、学んで、経験して……誰よりも優れた花騎士フラワーナイトって……『一番』って、何だろうって」

固く誓つたモミジの歩みは止まらない。

「だから——いつてきます。必ず戻ってきますから」

メイゲツカエデに手を降つて、先ゆく緑髪の少女……サボテンの背中を追つてモミジは駆け出した。

——さよなら、私の騎士団。

メイゲツカエデがまた自分の名を呼ぶのかとモミジは走りながら思った。だが彼女は何も言わない。振り向くことをしないモミジには、背後のメイゲツカエデがどんな表情で自分を見ているのか分からなかった。

やがて遊歩道の先を歩き続けていた親友、サボテンの背中に追いつく。彼女と横並びの形となつて道を歩き始めると、サボテンは言う。

「お別れ、すんだ？」

「はい」

すでに団長や親しい者たちに別れを告げている。この世界、スプリングガーデンの全土には害虫と呼ばれる人類の敵が至る所に存在する。たった一人でこの世界を渡り歩いていくことに、反対を示す者も少なくなかった。それでも、モミジは決断した。

「行きましょう……サボテンさん！ あなたと私で……この世界を見に！」

「うん」

二人でともに前を見据えながら歩き続ける。

「強くなりたい」とモミジの思い描く、『一番の花騎士』フラワーナイトになるための旅路。その始まりの道は眼前に広がる平原の彼方まで続いている。

モミジは決して振り返ることなく、サボテンとともに勇ましく前に進み続けた。

剣と拳

——ああ、またあの時の夢か……

モミジはまぶたを開けた瞬間にそう思いながら、まとわり付くような眠気を押し切って体を起こした。富んだ胸を最小限の面積で隠す黒のアンダーシャツと黒のミニスカート姿という動きやすさを重視した格好で、ハンモックに揺れる体を動かす。気温は少しばかりの涼しさを感じる程度だ。

軽く伸びをして、深呼吸。昨晚たき火を焚いていた焦げ跡を挟んで、相方の少女の姿を探すものの、どこにもいない。もう一つのハンモックはもぬけの殻だった。

——さては。

モミジは近くの川へ向かう。

ここは森の中だった。今夜はどこで休もうかと昨日の夜、サボテンと相談したら「静かなところで川の近くが良い」と言う意見が合致したからだ。普段は街や人里の宿屋に泊まるのだが、訳あってここで寝泊まりを決め込んだ。

ハンモックにかけていた自分のハンドタオルを右手に携えながら歩くと、水音の跳ねる音が聞こえる。

……やはり、サボテンはそこにいた。緑髪のショートヘアに、動きやすそうな緑と白の上

着を身に着けた戦装束は、彼女の姿で間違いない。

彼女はちようど澄んだ水で濡らした顔をタオルで吹いている。顔を覆う布に熱中している彼女に対し、モミジは笑顔で声をかけた。

「おはようございます、サボテンさん。もう起きてたんですね」

サボテンが振り向いた。起伏の少ない表情がタオルから離れて露わになる。笑顔で声をかけるモミジに対し、サボテンはしばし口をわずかに開けた後で控えめな笑みを浮かべる。サボテンの事を知らない人間が一見すると、笑っているのかそうでないのか分からないぐらいの表情だった。

しかし騎士団の時から友人として付き合っているモミジは知っていた。その微笑みが、子供の満面の笑みに当たるくらい、明るく無邪気なものであることを。

「うん、おはよう。モミジ。……水、冷たいよ」

「ご忠告ありがとうございます」

サボテンの助言に耳にしつつ、モミジもタオル片手に川の横にしゃがみ込む。本当に冷たい。眠気が全て吹き飛んでいくようだ。

寝ている間にボサボサになった髪も直すため、頭も少しだけ濡らしてタオルを押し当てる。キャンプ地点に歩いていたサボテンを追いかけて、モミジは川から離れた。

「さて、歩きましょう」

リュックの中に突っ込んでいた朝食のショートブレッドを平らげて、モミジは薄明を仰ぎ見た。

朝日がだんだんと強くなる。サボテンとともにハンモックを片付け、近くにおいていた鎧とマフラーを体にまとったモミジは、続けて木に立てかけていた大剣を担ぎ上げる。

「そう、だね。もう少しすれば、害虫の目撃地点……モミジ、油断せずに行こう」

サボテンが、いつもの無表情で頷いた。歳も背丈もモミジと同じぐらいの彼女はモミジと同じく花騎士フラワーナイトの一人であり、プロツサムヒル王国直屬「セントフローレス騎士団」の一員だった。彼女は森の中で寝泊まりをする羽目となった原因を口にしつつ注意を促してきた。

——今いるここは、ベルガモットバレー領地あたりか。

サボテンと横並びになりながらモミジは木々の間を進み続ける。野鳥の鳴き声と木々の揺れる音が森の中に響き渡る。

もう少し辺りが整備されていたら、森林浴には良い場所かもしれない——そんなことを頭の片隅で思いながらモミジは辺りに目配せをしていた。

二日前に泊まった宿屋で、害虫の被害を受けていることを耳にしたモミジたちは、その退治をするつもりで森の中に自ら入った。一日で目的の害虫を見つけられず、安全な場所を見計ら

って見つけた川の近くで休んでいたのだ。

森の中は害虫たちの巢窟。『害虫』とは、死にゆく世界の支配者、と呼ばれる存在がこの世界に生きる人間とともに暮らす虫、『益虫』を洗脳し、支配下に置かれた生物を指す。『害虫』は支配者より魔力を授かり、無力な人間の生活を脅かす、正に人類の天敵とも呼ぶべき存在。

その害虫たちに唯一対抗できるのが、花騎士^{フラワーナイト}である。花騎士とは、スプリングガーデン各国のシンボルにもなっている世界花と呼ばれる神聖な植物から、支配者の持つ魔力とは対になる清らかな魔力を授かった戦士だ。当然、害虫に対して戦えるモミジたちも花騎士^{フラワーナイト}である。

花騎士^{フラワーナイト}だけが、この世界で害虫に対抗できる唯一無二の存在。

サボテンもモミジも、恵まれた加護を授かった少女であった。世界花の啓示を受け、花騎士^{フラワーナイト}として選ばれて幾度も害虫との死線をくぐった戦士であり、その腕は高く評価されていた。

だからこそ、森の中であろうとも害虫が近づかないところを見極めて一晚を明かすことができた。害虫の中でも様々なタイプが有り、生態には特徴がある。睡眠も十分取れて、二人で相談し合った甲斐もあった。

「……森の中に入ってだいぶ歩きましたし、コンパスの方向と照らし合わせると、この辺りはもう地図に載ってない場所でしょう」

モミジは開いていた地図をしまいつつそう言った。

自分たちはベルガモットバレーの南西の遊歩道からこの森に入った。目撃証言によれば件の

害虫は北の方に逃げていったと宿屋で聞いたが、一向にその姿を見ない。

「この付近に駐在している騎士団はない。……これ以上悪さする害虫、放つては置けない。害虫が生きた分だけ、人間の命が脅かされるのはどうか、したい」

「そうですね。それに、より強き害虫を討つことも、コレも私たちの修行の一環なのですから」
モミジは旅の目的の一つを口にする。

セントフロレスの中で戦果を上げていたモミジは、正に優秀と称される花騎士だった。

しかしモミジ自身は自分がどのように強くなれば『一番の花騎士』になれるか分からなかった。他人の賞賛など、モミジは求めていなかった。

「もっと強くなりたい」。モミジが友人であるサポテンに相談した時、彼女が提案してきた事が旅だった。

サポテンもまたセントフロレスにおいて腕の立つ花騎士だった。モミジとは同期でありながら、戦場で害虫を難なく倒し続ける姿から『霸王』の異名を持つほどの強さを秘める少女だ。

彼女もまた、自分の求める『正義の在り方』を見出だせず、力の扱い方に悩んでいたという。本人曰く、「人を助けられる自分の拳がどこまで届くのか見極めたい」だとか。元々大規模な騎士団であるセントフロレスにおいては、花騎士に任せられる任務のレベルをしっかりと管理している。故にある程度の強さを持つ花騎士が極端に険しい任務に着くことが無く、そ

れが戦果の多さや殉死者の少なさにつながっているのだが、それがより、「一番強い花騎士フラワーナイトになる」事を夢見ていたモミジにとっては、物足りなさを感じさせる材料となっていた。

——さあ、どこからでもかかってきなさい。

この旅で、既に任務で戦った害虫よりも強い個体を相手にしてきた。今度の敵もそうなのかと胸を躍らせながら、モミジは戦意に満ち溢れる。相まみえるはずであるう害虫がどこから来るのか。敵の姿を探しながら右手をいつでも背中に回せるように心構えた。

右手の先はモミジの相棒である大剣、爆葉刃だ。ガンブレードと呼ばれる複合技術が詰め込まれた、この世界スプリングガーデン全体的に見ても近代的な武器であり、今まで何匹をも強敵を討ち果たしてきた剣である。

「……モミジ、肩肘張りすぎ。もっと、リラックスしなきゃ」

「サボテンさん……」

ふと、背後にいたはずのサボテンがいつの間にか隣に立ち、右肩に手をおいてきた。

「大丈夫だよ、私たちなら。落ち着いて、騎士団にいたときと同じようにやればいいから。……無理に力入れても、苦しいだけ」

「そんなに私、焦ってましたか？ いつも通りのつもりですが」

「……利き手、落ち着かなさそうだったから。ずっと、開いたり閉じたりしてる」

そんなに——？

モミジはサボテンに導かれて、自身の右手を凝視してみた。背にある大剣をいつも掴むその手は筋肉がついて、か弱い少女のものから、戦士特有の無骨なものになった。

この手が落ち着かないほど、早く害虫を倒して強くなることに焦っているのだろうか、自分は——モミジはそう思った。

「……そう、ですね。早く倒して、強くなりたくて仕方がないのかもしれないかもしれません」

「え……」

「害虫を……『敵』を討てば、お姉ちゃんのように誰かを守れますから……」

モミジは花騎士フラワーナイトとなった時から決意している。

自分は姉、カエデアのように強い花騎士フラワーナイトとなるのだ。彼女が命を落として誰かを守ったように、自分も誰かの命を守りたい。

人々を脅かす害虫が一匹でもいるなら、その全ての虫の首を飛ばす。

世界花に選ばれたモミジの力は、そのためにあるものだと信じていた。

「氣遣ってくださって、ありがとうございます。けど、わたし平気ですから。早く倒して、次はベルガモットバレー首都にでも行きましょうか。そこで休んだら、次はどこへ——」

そうサボテンに笑い返して、心配してくれたことへ感謝しようとした矢先だった。

ふと、近くからパキリ、という何かが折れる音がした。

「……ッ！」

直感がモミジの体を脊髄反射で動かせる。同時に敵の気配を感じた。音の方へ顔を向けると、影が突如木の陰から跳躍した。衝動的に右手は背中へ導かれる。

——害虫!?

敵の姿を認識する前に、抜剣。手にした剣の腹を正面に突き出し、全身で感じる殺気からすかさず防御の構えを取った。刀身越しに見えた影はバツタらしき害虫だった。前脚を突き出して空中から蹴りを仕掛けてくる。

「甘い！」

爆葉刃^レで受け止める。鈍い鉄の音が森の静寂を打ち破った。

身の丈もあるほどの大きさと、数センチをも厚さを持つ大剣が頑丈な作りをしていたことが幸いし、害虫の一撃を難なく凌ぐ。

「サボテンさん！」

「うん！」

すかさず、モミジは友の名を呼ぶ。

既にサボテンは唯一の武器となる、グローブと一体化した拳鎧を装着していた。サボテンは拳で害虫と戦える花騎士^{フラワーナイト}だった。

サボテンは爆発的な瞬発力で前へ跳ぶ。魔力を体に巡らせて行なう体力の強化だ。モミジの持つ魔力の主だった特性は、手にした刀剣類の切断力を高める能力であるが、対して、サボテ

ンのそれは己の肉体全てを純粹に強化する特性を持っていた。

「はあッ……！」

靜かに燃えるような感情が込めて一声を放つサボテンは、モミジの劍を蹴った害虫めがけて右腕を突き出す。

「な……っ」

しかし、その手が相手の体をえぐることはなく。害虫は爆葉刃^レを今一度蹴って、反動を使ってその場から離れる。連続して二回も蹴りを受け、バランスを崩しかけていたモミジは突き飛ばされて地面を転がった。

「くっ……！ 痛っ……！」

「モミジ？」

「大丈夫です、こんな程度。……やっと見つけましたよ、害虫！」

モミジはガンブレードを杖代わりにして素早く立ち上がりつつ、自分たちを襲ってきた敵……害虫を捉えた。バッタ害虫の跳んだ先には、もう一体姿の酷似したバッタ害虫がいた。色違いの同種らしい。

「双子の害虫……！」

「二体二のフェアを望んでいるというわけですか？」

モミジを襲ってきた方は緑色。もう一体は薄茶色の体色をしていた。二匹の害虫は双子の兄

弟のようにも見える。しかし、どうやら普通のバツタ害虫とは違うらしかった。

後脚が発達しているのか、どちらのバツタも人間と同じように二本で立ち上がっている。人間に似たシルエットは、宿屋で耳にしたバツタ害虫の特徴に違いないだろう。

害虫は元々人間の暮らしを支えていた益虫であり、人とともに暮らしてきた。その過程で祖先となる虫から進化し、人間と同じように知能と体の仕組みを進化させた個体が数多くいたことをモミジは騎士学校で習っている。おそらくは、目の前の人型バツタもそうなのだ。

「相手にとって、不足なしです！」

モミジは不遜に言い放った。害虫は何の反応も示さない。害虫にこちらの言葉や挑発は通じない。死にゆく世界の支配者によって人を襲うようになった害虫に、理性と知性は無い。本能から狂気に犯された敵に対し、モミジは剣を携えて息巻いた。

一体あの害虫はどれだけの人を殺してきたのだろうか、と思いつながら。

「ここで、決着をつけよう」

隣にいたサポテンが言う。彼女は左手を前に突き出し、静かに右手を引き絞って構えを取っていた。その弓を引くような動作はサポテンが戦うときに作る独特なスタイルだった。

サポテンの拳は薄茶色のバツタに向けられている。薄茶色のバツタもサポテンに対し、前脚を胸の前に持ってきてボクサーのような構えを取っていた。緑色のバツタが蹴りを仕掛けてくるのなら、あの薄茶色は殴ることが得意なのだろうか。

「……モミジ、緑の方をお願い」

「承知しました」

互いに二対二。各個撃破の意志を確かめ合い、モミジもまた、爆葉刃^{くわ}を正面に据える。モミジが害虫と相なすときの準備動作。正眼の構えだった。

バツタたちの方も、自分の敵が誰であるかを本能的に悟つたらしい。複眼の向く先が、モミジとサボテン、それぞれに向けられる。

戦闘開始のゴングは、緑のバツタの跳躍音だった。

——来る！

大地を勢い良く蹴り出し、空中から緑の影がモミジに襲い掛かってくる。正面に構えたガンブレードの刀身の長さを頭に叩き込んでいたモミジは、迫る敵との相対距離を直感的に把握した。

迎撃する。取っ手に備え付けられた銃爪^{ひきがね}にモミジは人差し指をのばした。モミジの愛剣であるガンブレードは、その名称と裏腹に銃口はなく、当然銃弾を撃ち出す機構は備わっていない。しかし代わりと呼べる機構が、銃爪^{ひきがね}に直結している。モミジは再び頭上から強襲を図る敵に、応じるように、怯むことなく唐竹割りを繰り返した。

「もらったッ！」

肉の避ける感触が手先の神経に届いた。

ガンブレードの先端が、緑バッタの脚に深く突き刺さる。それと同時に力強い衝撃がモミジの全身を襲った。爆葉刃の刀身から耳にしたことのない軋む音が響く。意に介さず、とつさに花騎士の証であり、力の源でもある世界花の魔力を駆使し、体力を強化。立ち姿勢を維持する。サボテンほどではないにしろ、魔力は例外なく花騎士の体の能力を高められた。敵であるバッタの脚力は絶大なものであったが、なんとか踏みとどまり、敵の蹴りをしのぎ切ることに成功した。

そして、敵の脚に自身の剣が刺さってくれたことにモミジはニヤリとした。思い通り、狙い通り——これなら、逃がさない！

「燃え上がれッ！」

無意識に歪めた口元から戦意を乗せた威勢を発し、モミジは剣の銃爪を勢い良く弾いた。

直後、モミジの剣が紅蓮の色を灯す。巨大な刀身は太陽のように輝き、周囲の景色が揺らめくほどの高熱が突如として生まれた。

緑バッタ害虫がわめいた。害虫特有の騒音のような奇声を上げ、背中の羽を矢鱈に動かし、もがき始めた。

剣の柄の部分に収まっている、翠色の宝玉。それはモミジの魔力を高める魔石の一種だった。銃爪の操作によってガンブレードの宝玉は励起状態であることを示す紅色に変貌し、モミジの持つ魔力のもう一つの特性、炎の顕現を増進させる。結果、爆葉刃は刀身に灼熱の炎を宿し、

赤熱化した。モミジ自身の魔力由来の炎でなければ、剣を持つモミジも大火傷を負うほどの熱量だ。

バツタはその熱に苦しんでいるのだ。さらには、深々と好き刺さった脚が災いして、先程のように剣から逃れたくてもかなわない。熱によって外骨格が溶けてしまい、剣に離れられなくなったバツタは体をよじらせた。灰となった脚を失い、バツタの体は力なく地面に落ちる。

「その首、貰いました……！」

苦しむ緑バツタに悠々と近づき、モミジは炎の剣をバツタの頭部めがけて振り下ろす。その首が宣言通りに撥ね飛ばされ、灰となり、消えていった。残った体もまた灰となり、魔力で浄化されて消えていった。確実な勝利をモノにしたモミジはサボテンの方へ向き直る。

「サボテンさん、こっちは——！」

「——大丈夫、すぐに終わる」

サボテンはなんでもないように応じながら、薄茶色バツタから繰り出される前脚を紙一重で受け流し続けていた。

「なかなか鋭いパンチだけど……」

緑のバツタとは対象的に、薄茶色のバツタは前脚によるパンチ攻撃を得意としていた。二つの前脚から、人を簡単に殺せる暴力がサボテンに向かって何度も放たれる。アレを受ければ、例え世界花の加護で体が強化されている花騎士フラワーナイトも、無傷ではいられないかもしれない。

その全てを、サボテンは鉄壁の防御とも言える技術で捌いていた。顔、腹、胸。急所めがけて突き出されるパンチを、最小限の動きで弾く。

それはどれも人の命を用意に奪える凶器だと言うのに、まるでスパarringsの相手をするかのように、容易く躲けてみせた。

サボテンの動きは無駄がなく、見事なものだ。その流麗な動きには美しさすら感じられる。

だからこそ、サボテンは騎士団で後輩の花騎士^{フラワーナイト}たちに『霸王』などと呼ばれていた。無欠の体術は人を惹き付けるほどのものだった。

そして、連続して繰り出されるバツタの拳のリズムがふと乱れた。薄茶色のバツタは自身の拳が通じないことに業を煮やしたのか、サボテンから距離を離れた。

——何をするつもりなの？

モミジは相手の動きを怪しんで、剣を携えて薄茶色のバツタに向く。いざという時は援護をしなければ、と。

しかし、バツタはカチカチと口から音を打ち鳴らしながらこちら二人を見渡したあと、森の奥へと跳ね出した。

敵わないと感じたのか。バツタは逃げ出したのだ。

「待て!!」

「背を向けるなんて……!」

仲間のバツタをやられて、自らの不利を悟ったのだからか。モミジは真紅のマフラーを靡かせながら全力疾走で後を追った。サポテンも付いてくる。

このまま振り切られて傷を癒されでもして、別の人間を襲わせるわけに行かない。もしくは、害虫の中には仲間を呼ぶ場合もある。モミジもサポテンも中位騎士の位を持つほどの腕を持つが、たった二人では大量の害虫を相手にはできない。「ここで仕留めるべきだ」とサポテンとアイコンタクトで意思を交わし、モミジは体に魔力を回すため、爆葉刃の銃爪ひきがねを長押しして魔力を打ち切った。爆葉刃の励起状態は、モミジの意思とは関係なく魔力の消費につながるからだ。

赤熱化を解いたガンブレードの刀身が鈍色に戻り、宝玉が翠となる。大剣を背中に納め、モミジはサポテンと全力で薄茶色のバツタを追って森の中を突き進む。

逃げるバツタを追いかけているうちに周囲は明るくなり、バツタが逃げる先の森の奥から、朝日の光が自分たちを照らしていた。森の果てだ。

その光へとモミジたちは進む。
森から抜けると断崖絶壁だった。

崖の向こう側には、赤色と黄色に色づき紅葉を迎えた森の木々が渓谷を覆い尽くしている。ベルガモットバレー特有の山と谷ばかりの景色だった。この国の領地のほとんどは渓谷地帯であり、美しい山模様を描いている。

しかし今は感傷にふける暇もない。崖に追いつめられたバツタはコレ以上進めないことがわかったのか、崖の淵で自分たちに向き直っている。モミジは意識を離さないよう、再び剣に手を伸ばした。

「もう逃げられませんよ。おとなしく、駆逐されなさい！」

バツタに勝ちを言い渡し、モミジは抜き放った剣とともに仕掛けた。その懐に踏み込み、炎の軌跡を横薙ぎに繰り出す。

しかし、往生際が悪かった。バツタは特有の脚で高く跳躍し、モミジの頭上を飛び越した。

——それくらい、私たちは織り込み済み！

しかしその動きも予想の範疇だった。バツタ害虫と戦った経験は少なくない。この害虫も同族と例外ない動きをしてくれたことに対し、モミジはほくそ笑んだ。

何しろ自分の後ろでは、サポテンが既に害虫へ万全の構えを取っているのだから。

「任せて」

跳躍したバツタはそのまま直下のサポテンにパンチを繰り出そうとしていた。落下分の威力を加えたものだ。

その拳は、先程のモミジの体に衝撃を与えた緑色のバツタの蹴りに匹敵するほどの威力を持つのだろう。しかしサポテンは動じない。

「人を襲う拳は——」

サポテンはそう言い、体をとっさに屈めて茶色バツタの前脚を躲していた。

そしてサポテンは、躲したと同時に左手を、力いっぱい引き終えていた。完成された反撃の流れだった。

「ゆるせない！」

一撃だ。たった一撃のカウンターとして、サポテンはバツタの胸めがけてアッパーを繰り出す。サポテンが秘める魔力で強化された高速の左腕は、空気摩擦によって炎に包み込まれる。

外骨格が碎ける耳障りな音が響き、炎に包まれたバツタはなす術なく崖下へ跳ね飛ばされた。勝負はついた。サポテンは敵を打ち倒し、深く息を吐いて残心した後突き出した拳の力を解く。拳の炎はすでに消え去り、焦げ跡一つないサポテンの掌が開かれた。

——さすががね、サポテンさん。

その牙え渡った彼女の拳を目前にして感心したモミジは、「爆葉刃」を背中に収める。慣れ親しんだ重みを感じながら、モミジはサポテンの方へと歩み寄った。

「お疲れ、サポテンさん。これで問題の害虫を倒せましたし、一件落着ですね。今日もすごかったです、サポテンさんの拳」

「……大したことない。私よりも、モミジ。……ケガとかしてない？」

「私は大丈夫です。ちゃんと敵の攻撃、剣で受け止めましたし、倒れた時の擦り傷ぐらいケガには入りません」

「なら、よかった」

サボテンは柔らかくほほえみながら拳鑢を両手から抜いた。そして服のポケットにしまって、二人して景色の広がる崖の向こうを見据えた。

この世界は広い。さっきのような害虫がこの景色の中の何処かで生まれ、人を襲っているのだろう。生まれ育った場所で死ぬることが、害虫の唯一の幸せかもしれないとモミジは思った。

——……しかし、あつけない。あのバツタ、手応えがなかった。

害虫の落ちていった崖下を眺め、モミジは思う。たった一撃二撃で息絶える害虫ならば、騎士団の任務で相手をしていた害虫のほうがよほど強かった。

並の強さの害虫を相手するばかりでは、己をより強くすることはできない。弱虫を殺し続けているだけでは、いつまでも強くなれはしない。

自分は、もっと強くならなければならないのだ。姉が生きていたらともに戦えるような、誰よりも優れた、『一番』にならなければいけないのだから。

「……さて、歩道から離れちゃいましたね。ここはいつたいどこなんでしょう」

「自分たちが今いるところは……やっぱり……首都に続く道から、だいぶ逸れたみたい」

サボテンがリュックから羊皮紙を取り出し、凝視している。それは今いる国、ベルガモットバレーの領内を示す地図だった。王国から公式に頒布されているそれは、プロッサムヒルを出る前に自費で買ったものだった。

「具体的には？」

「いま調べてる」

サボテンとモミジはその場に座り込み、二人で広げた地図を覗く。自分たちが最後にいたはずの宿のあった道から人差し指を這わせて後を追ってみるが、サボテンの指は何度も地図の端にまで届いていた。

「やっぱりここ、地図の外みたい。ここはベルガモットバレーの東側なのは間違いないと思うけど」

サボテンはそう付け加えるが、モミジは自分たちが今どんな状況に置かれているのかを口にした。

「ということは私たちもしかして……迷ったってことですか？」

「もしかしなくてもそう」

わずかに肩を落とし、落胆する。

過ぎてしまったことは仕方ないし、使命の上で戦ったことなのだからモミジは割り切るように努めた。

「……どっちいけば首都なんでしょうか。太陽はあっちから上がってるから……」

これからどうすれば良いのだろう。モミジは地図とにらめっこをしていると、サボテンが崖の向こうの景色を眺めていることに気付く。

「何してるんですか？ 辺り一面、山ばかりですよ？」

ベルガモットバレーの国土の特徴そのものを、サボテンに伝えた。この国はどの山の上から景色を眺めても、紅葉に染まった山ばかりしか見えない。様々な高さの山が並ぶものだから、遠くの景色が見えず、それがさらに山での遭難につながりやすいということは、モミジも知っていたのに。まさか自分たちがその一員になるなんて……

「……モミジ、あっち、いこう」

「あっち？ あっちって……」

サボテンは急にモミジの肩をつつき、ある一点を人差し指で指し示して呟いた。

訝しみながら指し示された方を見やる。山々が連なった尾根の中、一つだけ岩肌が一部むき出しになっている山があった。アレが目印らしい。

「この地図には乗ってないけど、この辺りからあっちの山の向こうは桃源郷だったはず」

「えっ、桃源郷ですか!？」

「地図とコンパスは見てるけど、殆ど勘で言っているから。……勘違いだったら、ゴメン」

「まあ、行きましようよ！ どのみち、このあたりで往生は無用ですし」

茫洋とした瞳を山に向けたまま言うサボテンにモミジは生き生きと返した。

桃源郷とはベルガモットバレー領地内に存在する歓楽街の名称だった。観光客向けに豪華な温泉街があり、男女関係なく羽を休めるにはちょうどいい場所である。

モミジも騎士団にいた頃任務の一環で、桃源郷に寄ったことはあるので、向かうならば是非を問わなかった。

「でも……この崖……谷を超えなきゃいけない」

そう問うサボテンの瞳は、眼下に向けられていた。害虫が落ちていった崖下はわずかに小川が見える深い谷だった。普通の人間ならば、どう考えても迂回するしか無い。

しかし、モミジとサボテンには無用だった。二人はこの谷を超える術を持ち合わせている。

「だったら。コレも修行の一環。私たちがどっちが先にあの山を超えるか、競争しましょうか」
「賛成。のんびり歩いてたら、せつかく登った日が、また落ちる」

モミジの提案に彼女は乗ってきた。期待通りの答えに胸が熱くなる。

モミジは背負っていた、爆葉刃を再び抜剣し、銃爪を引いた。己の魔力で紅く輝くガンブレードを構え、モミジは槍投げのように剣を振りかぶった。

対するサボテンは準備運動として手足を伸ばしていた。おそらくは気合を入れなおしている意味もあるのだろう。

「よしっ。位置について——ようい」

モミジの合図で二人は脚に力を含める。普通の人間には二人の背姿は前向きな自殺行為にしか見えないだろう。

だが違う。二人は谷底に落ちるつもりは毛頭なかった。

「ドン！」

モミジの合図でサボテンは谷に向かって跳躍し、モミジは正面へ、爆葉刃^グを投擲した。すかさずモミジも足先に魔力を集めて愛剣へと跳ぶ。

跳躍したサボテンは眼下の崖の岩肌を蹴り、強化した跳躍力で谷の向かい側へと跳んだ。向かいの岩肌にとどり着いたサボテンはわずかな凹凸を連続で蹴り込み、谷底から上へと登っていく。タダの人間からすれば非常識な行為だが、花騎士だからできる常識的な行為だった。

対するモミジは、爆葉刃^グの刀身へ、サーフボードのようにして乗り込んだ。

「飛べ、爆葉刃^グ！」

足先から魔力を剣に伝導させる。すると、爆葉刃^グは柄先にある魔力の噴出孔から爆炎を勢い良く吹き出し、浮力と推進力を得た。モミジがガンブレードに備わる爆発機構を活かして編み出した、空中飛翔の移動手段。空を飛べる花騎士。それはモミジの自信の一角を担っている特技だった。飛翔が可能な花騎士はこの世界で数える程度しかいないからだ。

空からサボテンの方を眺める。彼女は崖を伝って山の急斜面を駆け上がった。先ゆくモミジに追いついてきたサボテンはモミジに返す。

「負けない」

「こっちも同じですよ！ 私だって！」

モミジは飛び、サボテンは跳ぶ。次第に頂上が迫る。目的地である山稜へ向かって、鳥や蝶

よりも疾く駆け上がる。二人して山を滝登りのように駆け上がり、数分の後に山頂の上へ二人は到達した。

「サボテンさん、あれ……！」

「やっぱり、あった」

空の上で、二人は滞空しながら思い思いの言葉を口にする。山の向こうは豊かな水に囲まれている歓楽街が見えた。山ばかりのベルガモットバレー近くに存在する、傷ついた人間の理想郷と呼ばれる場所。

二人が買ったベルガモットバレーの正規の地図に乗っていないのは当然だ。なにせ、桃源郷はベルガモットバレー王国に公式には認知されていない場所なのだから。

モミジとサボテンはそろって着地し、一息ついた後に山頂からその美しい景色を眺めた。

「よくわかりましたね、こっちに桃源郷があるなんて」

「当てずっぽうみたいなもの。ここまでくれば、もう安心」

桃源郷の正門に続く林道も見える。あそこまでたどり着けば、またのんびりと歩いていくことができるだろう。しかし本来の目的地……首都への道からは随分と外れてしまった。

「せっかくここまで来たんですし、しばらく桃源郷で休みましょう」

「賛成。……久しぶりにのんびりできそう」

さほど強くない害虫を倒したとは言え、少しばかり疲れた気分だった。まずは一旦羽休めを

したい。

「じゃ、ここから道のところまで下りましょうか。……ところでサボテンさん？ さっきの追いかけてっこ、どっちの勝ちですか？」

「……」

そうモミジが言うと、サボテンは口を開けて両目を見開いた。「あつ」とでも言いたげな表情だった。彼女は自分たちが登ってきた方を見て、足元に視線を移したあとで言う。

「……ごめんなさい、ゴールラインがどこなのかまで、考えてなかった。同着、つてことではない……？」

恥ずかしそうに呟いたサボテンを目の当たりにして、モミジは引きつった顔で乾いた笑いを返した。

山を登ったときと同じように一気に駆け下りて、モミジたちは、桃源郷へ続く林道までたどり着いた。

道には馬車の轍や無数の足跡があるが、森や平原に比べると平らに整備されていて、歩きやすいのがあるがたい。

林道を抜けると、桃源郷の町並みを囲む外壁が見える渡し橋の前に出た。

桃源郷は樹海の中にポツンと存在する、輪状の湖の中洲の上に造られている。そこに住む

人々は国家や思想に関係なく、多種多様な人々が入り混じっていると騎士団内の噂で聞いたことがあった。

曰く、害虫の被害に遭い、身寄りを失くした者や変えるべき場所を失った者たちの集まりだと。公的に花騎士^{フラワーナイト}として活動できない、世界花の加護を受けたものが身を寄せる場所らしい。

しかし、そのような暗い噂とは正反対に、桃源郷^{トウエンキョウ}の毎日は活気づいている。

昼間はベルガモットバレー特有の和の文化が溢れる、のどかな温泉街としての姿を持ち、夜は豪華な遊郭などを備えた風俗街としての側面を持つ。いずれにしても千年前からスプリングガーデンで続く害虫との争いに疲れた者たちが、心の癒やしを求めて足を運ぶ場所として大成していた。

今のモミジたちは、害虫との戦いや山登りで疲れている。桃源郷^{トウエンキョウ}に寄るタイミングとしてこれ以上のものはないと、正門を眺めながらそう思った。唯一モミジが気に入らないのは、桃源郷^{トウエンキョウ}のもつ風俗街としての面だが、そのあたりの線引きはしっかりとされている。まさに理想の休憩地点だ。

「生まれ、二人共」

中洲へと続く渡り橋を通った後、モミジとサボテンは、桃源郷^{トウエンキョウ}の正門で呼び止められた。二人一組の門番の片方がモミジを睨みつける。

「身分を示して欲しい」

「わかりました……これで良いでしょうか」

彼の言葉に応じ、モミジとサボテンは常に肌身離さず身につけているロケットペンダントを懐から取り出した。『セントフローレス』に在籍していた頃に交付された代物である。ロケットを開くと、中には華霊石と呼ばれる世界花の魔力を秘めた石をあしらった、騎士団の紋章が刻まれていた。騎士団によって身分証明として渡されるものは様々であるが、『セントフローレス』の場合は携帯性を重視したペンダントだった。

モミジとサボテンは騎士団から離れているが、抜けたわけではない。互いに一度も使ったことがない長期休暇制度を利用して、旅を行なっている。

「やはり、花騎士の方でしたか。『桃源郷』には何用で？」

「修行の旅に出ている、ちょっと休ませてもらうとおうと思ひまして——」

すぐに門番は朗らかな顔になり、そう続けた。『セントフローレス』はプロツサムヒル王国直属の騎士団であるためその存在は他国にも広く知られているのだが、『桃源郷』付近での任務を引き受けた『セントフローレス』の存在が認知されているのは当然とも言えた。

どこの国の民も、害虫に立ち向かう事のできる花騎士に対しては、優しく接する対応がありふれているため、モミジは相手の対応に明るく応える。『桃源郷』に住む人間の中には、国家直属の花騎士を疎む者もいるようだが、『セントフローレス』に対しては、『桃源郷』側の人間も比較的友好に接してくれるのがありがたかった。

モミジが門番と話す一方、サボテンはモミジの背後に隠れるように立っていた。彼女は恥ずかしがり屋であり、顔を合わせた覚えのない相手の前では常にそんな様子だった。

——こういう時は私の出番、ですよ。

こういった場ではハキハキと喋ることのできる自分がふさわしいと、モミジは心得ていた。

「あつ、あなたたちは……」

「あつ」

だからこそ。門番と話している間後ろで縮こまっていたサボテンが珍しく声を上げたことに振り向いてしまう。その視線の先には、刀を携えている薄赤色の和服を纏った少女がいた。彼女はモミジたちを眺めて僅かに驚いたように口を開けている。

「モミジさん！ サボテンさんじゃないですかッ！ お久しぶりです！」

「ナデシコさんッ！ 合同作戦以来ですね……！」

視線を向けた瞬間に耳朶を打つ明るい挨拶。赤毛のポニーテールの少女、ナデシコが頭を下げて丁寧なお辞儀をしていた。上がった顔は幼く、無垢と言った言葉が似合う笑顔を浮かべている。

彼女は和服姿に薄紫のケープを羽織っている。胸元には勾玉と呼ばれる変わった形状の魔石を身に着けていて、腰には白色の鞘に収まった、業物を佩^はいていた。更に彼女は右手に野草やキノコが数多く入ったバスケットを提げている。

その武器を携える姿が示す通り、彼女も世界花に選ばれた加護の持ち主……戦士だった。彼女はここ、桃源郷^グの自警団を手伝う若き天才剣客だ。数ヶ月前、セントフローレスを主軸として近隣国の花騎士^{フラワリーナイト}総出で害虫と戦った、汚染害虫事件にも協力者として駆けつけ、多くの害虫を打ち払って人々を守ったと聞いている。

彼女は加護を持つがモミジたちと違い、本来は狭義に当てはまる『花騎士^{フラワリーナイト}』ではない。国家が登録する花騎士^{フラワリーナイト}の公式名簿にナデシコの名前は記されておらず、国が認めた騎士団にも所属していないため、あくまで民間人でしかない。

しかし、その活躍から人々はナデシコのような『戦える魔力を宿した者』に対しても尊敬を込めて花騎士^{フラワリーナイト}と呼ぶ。一方でモミジたち正式に騎士団に所属している人間は、ナデシコのような民間人に対しては例え魔力を持つとも『花騎士^{フラワリーナイト}』と呼ばないことが慣習だった。

しかしだからといって、差別的意識はモミジたちにない。ともに害虫に立ち向かえる、同じ人間。仲間なのだ。

「山菜取りに行つてたんですか？」

モミジが問う。佩いている刀は害虫に快適した時に備えているものだろう。

「はい。桃源郷^グの西にある山のおもとは、いろんな野菜や、キノコが生えてますから、ハナシヨウブさんに頼まれて行っていたのです。……お二人はどうされたのですか？」

「道に迷っちゃって……害虫を追っかけて、道を離れてしまつたんです。そこで、偶然ここに

寄ったので、一休みしようかと」

「このあたりの森は迷いの森です。入れば危ないですよ？ ……一体どこから来られたんですか？」

「あの……山の上から」

ナデシコとモミジの間に立つサボテンが、件の山を眺めながら呟いた。それを聞いてナデシコはあからさまに目を見開いて驚愕する。信じられないと言わんばかりに。

「あの山のふもととは天然の迷路です……ずいぶん挑戦的なことをされたのですね」

「[〚]桃源郷[〚]の道まで一気に降りたので、なんとか無事にすみました。サボテンさんと私でなら、楽勝です」

「さすが、ブロッサムヒル最強とうたわれる騎士団の方々ですね……そうだ！ ここでいつまでもお話と言うのもなんですし、一度、旅館桃源郷の方に来てみませんか？ 今なら、オトギリソウや、ハナシヨウブさんもいるはずですよ！ お二人なら、歓迎しますよ！」

ナデシコは意気揚々とモミジたちに提案する。つま先で小さく跳ねながらそう言う様子は、本当に嬉しそうだった。モミジとしても知り合いとここで再開できて、嬉しくないわけがなかった。

「良いですね、お茶でもしながらゆっくりと——」

グウウ。

モミジの返答は空腹を示す腹の音によって遮られた。朝から一口程度のブレッドを頬張っていたが、害虫と戦ううちに消化してしまつたらしい。堪らずモミジは恥ずかしさから顔を熱くさせる。

グウウウ。

そして、自分のものではない音を聞いてモミジはサボテンへ振り向いた。彼女も酷く恥ずかしそうに俯き、顔を真っ赤にさせていた。

お互い、お腹が減ってしまったようだ。

「ふふっ、お話の前に、まずはちゃんとした朝ごはんになりそうですね」

ナデシコは口元を抑えながらそう言う。

「あつはは。すみません……」

モミジとサボテンは顔を赤くさせながら、ナデシコの後が続いて、桃源郷の正門をくぐつた。

「「ごちそうさまでした」」

「はい、お粗末さまでした」

ベルガモットバレーに伝わる文化に則り、手を合わせて食後の挨拶を言う。

旅館桃源郷の一室を借りて、モミジたちは朝食を終えた。

モミジとサボテンの使った食器を片付けるのは、大人の女性らしい柔らかい笑みを湛えるハ

ナシヨウブという女性だ。茶髪のロングヘアを垂らした彼女は、ニコニコしながら手早く食前に皿を移し、片付けていく。

その一連の動作は、彼女の名の由来となった花言葉の一つ、『優雅さ』を体現していた。

「余り物の材料で作ったものですが、気に入っていただけただけで何よりです。昨晚泊まるはずだった方が急にキャンセルしたものですから……」

「ハナシヨウブさんたちの料理を無下にするなんて損な人だよー。モミジさんたちは本当に運がいいよ！　なんてったって、旅館街で大人気なんだからッ！　ハナシヨウブさんのお料理はッ！」

「あらあら。私よりいい腕の方は他にいますよ。オミナエシとか……私の代物はここの旅館のついでに過ぎません」

ハナシヨウブの言葉に答えたのは、ナデシコの友達であり、この旅館桃源郷を手伝う少女、オトギリソウだ。彼女は普段着代わりらしい黄色の派手な忍者服姿を纏っている。その色合いに相応しいほど、天井知らずの明るい性格の持ち主だった。

「そういえば……なんでナデシコさんやオトギリソウがここを手伝ってるんです？」

モミジが問う。記憶が正しければ彼女たちはこの地、桃源郷の自警団に属しているはずであり、旅館で働いているとは聞いた覚えがない。

「ちよつと今、桃源郷はあちこちで忙しくてね……仲居を務める私の友達のはゼランとかも、

そっち行っちゃってるんだ。だから旅館の人手が足りなくなっちゃって、今日は朝からナデシコちゃんと手伝ってるんだよ」

「だからって、忍装束のまま旅館に来るのは感心しませんけどね……少しは己の正体を隠すべきなのでは？」

「大丈夫だよナデシコちゃん！ 世間で言う普通の忍者って、大体暗い感じの服でしょ？ 私のこの服じゃ忍者だってわからないよ！」

「自分で言うのですか!？」

モミジはサボテンと二人の会話を目の当たりにして苦笑する。本当に仲がいいな、と思わずにはいられない。

「でも、本当に助かっていますよ、二人共。そうですね……もう少し仕事を手伝ってくれたら、杏仁豆腐くらいはサービスしちゃうかもしれません」

「えっ、ほんとに!? わーい！ ハナシヨウブさんのデザートだー!!」

「仲睦まじい、とはこのことですね……」

モミジは二人のやり取りを目にして感慨深げに頷いた。サボテンも微笑んでいる。自分と同じ気持ちのようだ。

「まあ、ここの朝は毎日こんな感じですよ。……お二人の口にも私の料理が通じたようで、嬉しいです」

「いやいや、とんでもございません。あつたかいもの、食べさせていただいて本当にうれしいですから。白米とか、ここでも来なきやそうそう簡単に食べられませんよ……」

甘く、スツキリした味わいに舌鼓を打たせてもらったモミジが両手を前に出して横に振る。ブロッサムヒルもリリウッドも朝食はパンが基本だった。ベルガモットバレー特有の朝食である白米と味噌汁はあまりなじみがない食べ物だが、モミジにとっては好みの味わいだった。特に今朝の味噌汁は、赤味噌と呼ばれるものに海の幸であるシジミと呼ばれる貝を使ったらしい。スプリングガーデンに属する国家の民のほとんどは洋食派に加えベジタリアンであるため、貝や味噌汁の新鮮な味わいも際立った美味しさを感じる要素だった。

加えてここは内陸の国である。魚介類を内陸で仕入れようとすれば、輸送費などで必然的に高額となってしまう。どう考えてもこの食事は贅沢でしかない。リリウッドもブロッサムヒルも海に面していない国であるため、「この味はめつたに味わえないだろう」とモミジは痛感した。

「お姉ちゃんが言っていました。『料理人は刃物で人を幸せにできるお仕事の一つ』だって。ハナショウブさんは女将もできて料理もできる、素敵な人です」

モミジは人差し指を立ててカエデにかつて言われた言葉を伝える。

亡き姉の言葉は正しかった。先に花騎士フラワーナイトになっていた彼女の言葉は、幼かったモミジの心に焼き付いていた。形見の髪飾りに触れながら目をつむると、あのいつだって優しかった面影を

思ひ出す。

「お姉ちゃんのこと、モミジの口癖」

「お姉ちゃんが言ってた」、ですか？ サポテンさん」

「うん……モミジ、本当にお姉さんのこと、好きだから」

「そ、そんなに言わないでくださいよ、恥ずかしいです」

一同で照れるモミジを眺め、「あはは」と笑い合う。モミジは顔がまた赤くなるのを感じながら咳払いをして遮った。

「ほんとうに……おいしかった……わたしも、こういうの作りた、い、です」

「もしよければ、お二人に後でメモをお渡ししますよ？ あ、でも、海で採れるものとかはめつたに買えないと思うので、家で簡単に作れるレシピもお付けいたします」

「ありがとうございます……！ 宿とかで作ってみたいですね……」

「……モミジ、私たちは料理の修行をしているわけじゃ、ない」

「き、機会があれば、です。旅に料理道具まで持ち歩けませんからね……」

「……騎士団に戻った時、私たちが料理を極めてたら団長、困る」

胸が踊ったモミジだったが、サポテンにたしなめられて苦笑する。二人が旅で身につけるリュックの中は携帯食料であるショートブレッドばかりだ。宿にたどり着けばまともな食事にありつけるが、そうでなければ飽きが来てしまう。サポテンもモミジの思っていることは理解

しているらしく、言葉とは裏腹にモミジと同意見のようだった。

「さて、朝ごはんも終わりましたので、お風呂なんていかがでしょう」

「温泉まで……？ そんなつ、いいんですか!? 私たち、急に転がり込んできたのに」

「お幾らでしょうか。さっきの朝ごはんのお礼もしなきゃいけない」

続くハナシヨウブの言葉はモミジとサボテンにとって僥倖としか言いようのないものだった。

「いえいえ、お代は結構です。オトギリソウちゃんやナデシコちゃんと一緒にくつろいできてください。これから昨晩泊まった方々の部屋のお仕事もしなければいけませんので、その間部屋を空けてくれているとちようど良いのです」

朝食をタダで頂いたことに加え、今度は風呂もいただけるなんて。桃源郷に立ち寄って正解だった！

いっそ、桃源郷の近くで修行しようかしら——モミジがそこまで思っていたところで、ナデシコが口を開いた。

「え？ ハナシヨウブさん、私もお片付け手伝いますよ。昨晩はこの部屋以外、埋まってましたし……」

「私と他のお手伝いさんで人手は十分です。ナデシコちゃんも朝お使いを頼んでいましたし、疲れたでしょう。汗と一緒に流しておいてください」

「そこまで言うんでしたら……」

「やったあ！　このお風呂広いんだよねーッ！　モミジさんもサボテンさん、一緒にいいこいこ！　忍法、二人を湯船の中へ引きずり込むの術！」

「ちよ……ちよつと……引つ張らないで……」

「うわあああつ」

サボテンは右手を、モミジは左手を、弾けるような笑みを浮かべているオトギリソウに掴まれて、力任せに引つ張り出される。

「荷物は私が預かりますねー。さあ、ナデシコちゃんも」

「あ、もう！　オトギリソウったら！　……わかりました、私もお風呂に入ってきますねー」
背後から聞こえるナデシコの納得を耳にしつつ、オトギリソウに釣られるままに「女」の
一文字が描かれたのれんを潜り抜ける

——まあ、せっかくだしここは私も甘えさせてもらおう。

ハナシヨウブの好意を素直に受けることにしたモミジは、力を抜いて口元を緩めた。

霧のように濃い湯気が視界を覆う。

服を畳んで一糸まとわぬ姿となったモミジは湯船の直ぐ側においてある櫓ひのきの椅子に座り、桶に手を伸ばした。

「あつたかい……」

桶にすくったお湯に触れて、モミジは満たされる気持ちに浸りながら呟いた。

旅の間野宿になった際、寝る前に川の近くで水を浴びたり体を拭いたことはあるが、お風呂はここ最近お預けだった。大抵の宿はシャワーしか備えておらず、旅の疲れでさつさとベッドに倒れ込む日ばかりだったことも多い。王城生活でもシャワーだったために尚更そう思う。

愛おしそうに右手でお湯に触れた後、モミジはお湯で体にこびり付いた汗や疲れを流した。

——ああ、なんて幸せ。

最高の気分だ。

しかしそれは数秒後に無残に吹き飛ばされてしまう。

「忍法、水遁の術！ いやっほー！」

ざばーん！

モミジの目の前から水柱が勢い良く立ち、まともにそれを浴びてしまう。大波が鼻の中に入り、ツンとした痛さでむせ返る。

「げほっ、ごほっ、がはっ！」

「あはは！ 見たかっ！ 桃源郷自警団最強の忍者、オトギリソウの新技は！ それそれー！」

「あつ、オトギリソウ！ ちゃんとお湯を浴びて……！ うわあ、私の方にもかけないで、つたらー！」

犯人はやはりオトギリソウだった。この中ではしゃぎそうな女の子はあの子しかない。彼女は石床から高く飛び上がり、湯船の中にダイブしたのだ。

「すごい。水を使えないオトギリソウが、これほどの水遁を……！ 新技？」

「いや、ご丁寧にもボケなくていいですからサポテンさん。タダの彼女の冗談……うわっ！」
オトギリソウは絶えずはしゃいだまま、両手でお湯をすくい上げて撒き散らしてくる。

「いいかげんにして、オトギリソウ!!」

「やーだよ！ 私たちの後に誰も来ないんだし、これくらいいいじゃん、ナデシコちゃん！」
「私がそれを許せないんです！」

ナデシコはその様子に憤慨し、オトギリソウを捕まえようと湯船を駆け回る。邪魔なタオルを剥ぎ取り、華奢な白い体がモミジの目の前を通り過ぎた。ナデシコと同じくらい幼さを残している体のオトギリソウは、嬉しそうに広い温泉の中を駆け巡り、ナデシコの魔の手から逃れ続ける。

その様子を呆れながらモミジは眺めていた。

「……モミジ、大丈夫？ 随分とむせていたみたいだけど」

「はい……ええ……大丈夫ですとも」

何度もむせて肩を上下させていたモミジは、体を流した後で入ってきたサポテンから心配される。

彼女の方を振り向くと、わずかに日に焼けた血色の良い肌色がモミジの目の前に飛び込んできた。

拳で戦うという、害虫からの反撃を受けやすい戦い方に身を置いているにも関わらず、サボテンの体には古傷らしきものが見当たらない。筋肉質さを感じさせない柔らかそうな体が、彼女の質の良い体形をより強調していた。胸は大きく、それでいてくびれがしっかりとあるのだから、彼女の実力だけでなく、容姿まで騎士団や民の間で人気を得ていたというのも頷ける。

「うわ……ホントサボテンさんの、大きいですね……うらやましいです。私も、お姉ちゃんぐらいあつたら……」

「え……？ 私とモミジ、そんなに大差はないと思うけど」

「そうですか？」と答えつつ、モミジは自分の体を見つめた。彼女はそう言うが、自分の体の方がずっと筋肉質のように感じられる。爆葉刃^{ハヤブサ}を使いこなすために鍛えた腕と手はそれなりにゴツゴツしている用に見えて、身長もサボテンにはわずかに負けていた。

カエデからは「容姿にも気をつけなきゃ」と言われた覚えがあったため、騎士団に入ってから身だしなみには人並み程度に注意するようになった。しかし、モミジの目標はあくまで害虫を倒せる『一番の花騎士^{フラワーナイト}』になることだ。自分の容姿など、あまり気にした覚えはない。それでも僅かな劣等感は悔しさを生む一因となっていた。他者から見れば、モミジもサボテンに劣らないほどの美貌と肢体を持つているのにもかかわらず。

サボテンを始め、メイゲツカエデやスズランノキ、ニシキギといった親しい者たちに出会うまでは、表情すら硬いとよく言われていた。おかげで「近寄りがない」と言う言葉も、騎士学校に通う間に聞き飽きていた。

——今頃、リリイウツドのみんなも元気してるかな……

故郷の国、リリイウツドの騎士団に属している親友、ニシキギとスズランノキのことを思い出す。自分だけ国を出て、外国で騎士団に入るとは思いもしなかった。その分自分の腕を試せた気はするが、こうして旅に出てるぐらいには、騎士団生活が物足りなかったのも事実だ。

この旅の先に、何が待っているのだろうか。今のようになりたいときもあれば、辛い時も待っているのだろうか。

「忍法！ 大波小波大招来の術〜！」

そう思いを馳せながら露天風呂から空を眺めていると、再び通りすがりのオトギリソウの手によって、モミジはお湯を頭から被ってしまった。

「お、オトギリソウ……!!」

さすがにイタズラにしては度が過ぎていた。彼女の性格は前々から任務で知っていたが、まさかこんな目にあうとは。

「モミジ？」

——お姉ちゃんは言ってた。悪い子にはお仕置きしなくちゃ……！

モミジはわなわなと力のこもった掌を震えさせた後、湯に浸けていた裸身を起こし、オトギリソウの追跡に加勢した。

「こおらッ！ オトギリソウ！ 良くもやってくれましたねッ！！」

「うええ!? モミジさんまで追っかけてきたあッ!?」

「その首、貰い受けますッ!!」

「しかも捕まればお命頂戴イッ!?」

ふくらはぎのところまで深さがある湯船の中を猛進し、モミジはオトギリソウの小柄な体を目指した。本来なら裸を誰かに見られるのは恥ずかしい上、力任せに暴れるのは不本意だが、頭に血が上った今のモミジには関係なかった。

「挟み撃ちと行きましょう！ 右から追い込みますから、ナデシコさんは前からッ!!」

「わ、わかりましたッ！」

「わわあッ！ 二対一なんてずるいよー！ 暴力反対!!」

少女の怒声と喚き声がかたましく鳴り響く。唯一おとなしくしているサポテンは湯口の近くで目を瞑って温かさを堪能している。その間、三人はけたたましくお湯を跳ねさせながら逃走劇と追走劇を繰り返していた。

「わあああああ!!」

オトギリソウの前後にモミジとナデシコが立ちふさがる。勢いをつけて走り回っていたオト

ギリソウは石造りの温泉の中で足を滑らせてしまい、前のめりに水面へ派手に転んだ。

「神妙に……！」

「駆逐されなさいッ!!」

今がチャンスだった。オトギリソウに飛びかかり、ナデシコが押さえつけてモミジが羽交い締めにする。オトギリソウが顔をひきつらせた後にナデシコによる説教が雨あられのように降り注がれた。

「ふん、ふん〜♪」

そんな光景を前にしても、サボテンはマイペースに鼻歌を口ずさんでいた。

「……幸せ」

とろけきつた表情を浮かべながら、サボテンは自分だけの世界に浸っている。夢心地のような幸せを感じながら、モミジたちの説教が終わるまでサボテンは露天風呂を楽しんでいた。

「桃源郷の湖に異変……ですか」

モミジはナデシコの言葉を復唱した。

オトギリソウを二人で捕まえ、ナデシコがこっぴどく叱りつけたことによって、オトギリソウはナデシコの隣で縮こまっている。「アレくらいしないと反省しないんです」とは、ナデシコの談だ。

そしてモミジはサボテンとともに露天風呂の中、ナデシコが切り出した話を耳にしていた。「はい、ここ最近、桃源郷が組み上げた湖の水の水質が悪くなったようで……朝から門の外に出ていたのは、その調査も兼ねていたんです」

彼女が持ち出した話題はつい先日になって発覚した、桃源郷の周辺を流れる湖の異常だった。

桃源郷は中州に位置しているため、四方を湖に覆われている。その内、稲や野菜が育てられている田畑が多数存在する東側で、組み上げた湖の水が、穢れている事が発覚したらしい。

「お二人は橋を超えてここに来ましたよね」

「……うん。山の上からでもここ……見えた。けど、特に湖が変には見えなかった、かな」

「サボテンさんの言う通りです。穢れているどころか、むしろキレイに見えましたけど……」
「やっぱり、そう見えてたんですね……」

残念そうに俯いて、小さい声でナデシコはそう言う。

「どうかしたのですか？」

「……じつは、穢れているのは湖の底の方なんです。桃源郷の生活水は水の底から引いているので……表面はまだキレイに見えるんですが、穢れた水は黒く濁って、とても今、使えたものではありません。いざという時にためておいた水があるので、今はまだなんとかなりますが、このままじゃ桃源郷の美しい景色も、生活に必要な水も、どんどん穢されていきます」

「うう……私も、ナデシコちゃんと一緒に少し前から、桃源郷の外を見て回ってるけど……湖自体に異常は見当たらなかったと思うんだよ……！」

涙目で額をさすっているオトギリソウがナデシコの説明を補足する。先程までモミジに捕まり囚われの身となったオトギリソウは、罰としてナデシコの全力デコピンを受けたのだ。

ナデシコはオトギリソウとそう大差ない年齢の持ち主だが、愛染流と名がつく古流武術の師範を務めている。鍛え抜かれた体の一撃は、たとえデコピンだろうとかなりの痛さだろう。

「だったら一体、どこから穢れた水が？ 湖じゃないとしたら……！」

急な水質の低下など、何かしらの原因があるはずだ。モミジは直感でそう思いナデシコに問いただす。

「……多分、水源に問題があるのかもしれませんが」

「水源？ でも、たしか、桃源郷の湖ってウインターローズ領内の雪が溶けた地下水から来ていたはず……そんなところから穢れていたら、さすがにウインターローズもベルガモットバレーも静観を決めるわけが——」

モミジは旅館桃源郷に入る前に買い直した地図を思い返しながらそう呟いた。

桃源郷の北側に水源らしきものはない。何故なら、ベルガモットバレー北東に存在する雪国、ウインターローズから通っている地下水脈がベルガモットバレーの谷底へ向かって流れている。

下手をすればウインタールーズ国内で起きた問題の影響で、ベルガモットバレーが持つ要因によって害を被る図となる。そうなればいくら今は対害虫に向けて同盟状態を結んでいる時でも、国同士の問題が発生してしまうことになる。

「モミジさんの言葉は間違つてはいません。ですが、違います。この湖にはウインタールーズから続く水脈のほかに、もう一つ水が流れ込んでくる水脈があるんです」

「水脈……どこ……?」

初耳の情報だが納得もできた。〃桃源郷〃はスプリングガーデンの中でも端に位置する場所であり、王国の手も届きにくい。すなわち、現地の人間しか知らない未開の地が多くあってもおかしくはなかった。

「……ここまで言っておいて今更ですが、これについては、桃源郷〃の住民でないお二人には言えません。関係のない人が近づいてはならない、神聖な場所なんです。……そこは古くから、神様が宿る地って、言われている場所ですから。私もめつたに近づいてはいけなと言われているのですが、湖を調べても無意味だった以上、その場所に赴きます」

「そんな……いくらナデシコさんでも、一人で調べるのは危険です。もし、極限指定害虫や空の古代害虫みたいに、厄介な相手が現れでもすれば……」

今のスプリングガーデンはどの地にも害虫の魔の手が潜んでいる。

本来害虫は、タダの人間では太刀打ちできず、加護を受けた花騎士フラワーナイトであろうとも熟練に達し

なければ一人で害虫を斃すことはままならないのだ。

そして例え練度が高い花騎士フラワーナイトが複数人集まっても討伐できない程の強さを持つ害虫が近年、各国に出没している。

モミジの言う極限指定害虫がそれに当たる。

その名称で指定された害虫は歴戦をくぐり抜けた花騎士フラワーナイトが、四、五人集まってようやく倒せることができるという。極限指定害虫の発生した原因は定かではないが、そのあまりの強さに対し、「死にゆく世界の支配者」が過酷な環境で生きてきた害虫の生命力の強さに目をつけ、花騎士フラワーナイトの殲滅のために生み出したと騎士団では推察されていた。

日々、各国の軍や騎士団が数を減らそうと奮闘しているらしいのだが、討伐戦が起きる度に数多の花騎士フラワーナイトが往々にして殺され続けていると聞く。

モミジとサボテンが在籍している「セントフロレス」も、特務を与えられた花騎士フラワーナイトのみが、その任務にあたっているらしいと聞いた覚えがあった。

「もちろん、危険と判断したらすぐに戻るつもりです。私は、「愛染流」師範、ナデシコ。今も手ほどきを施している弟子を遺して、命を捨てるようなマネはいたしません。本当なら私以外にも、桃源郷「のみんなにお手伝い願いたいのですが、いまはこの汚染を食い止めるために、他の自警団の方々は、桃源郷」のあちこちに散らばってまして……」

「うう……私がつと強ければあ……」

「オトギリソウ。前に一緒に戦った時、くしゃみしてさらに転んで、害虫にやられそうになったことを忘れてるのっ？ とでもじゃないけど……私一人では庇いきれませんが、他の自警団の方がいない限り、ついてきてはいけません。かえって危ないです」

オトギリソウが本当に申し訳なさそうに涙目で弱々しく訴えた。彼女も正規の花騎士と同じく世界花の加護の持ち主であり、ナデシコから授かった『愛染流』の一派の使い手なのだが、ナデシコの強さと比べると雲泥の差があった。

それもそのはずで、オトギリソウはナデシコの弟子に当たるからだ。当人同士は年も近く、友人関係を結んでいるが、戦闘技術に関してはナデシコに叶うはずもない。

世界花から花騎士が授かった加護は、花騎士本人が身につけた戦の経験と、マニユと呼ばれる妖精、進化龍、開花鳥といった花騎士フラワースナイトに力を与える存在たちから与えられた魔力によってより強さを増してゆく。

加護が強くなるに伴い、その強さの基準というべき段階は大きく分けて三つ存在していた。

花騎士フラワースナイトとして、世界花から魔力の加護を授かった初期の状態『発芽』。花騎士フラワースナイトとして害虫を倒し続けて、秘められた能力を引き出せるようになる『進化』。自らに眠る全ての能力が覚醒し、限界以上に魔力を行使できるようになる、花騎士フラワースナイトの加護の最終到達点『開花』だ。

『一番』を目指すモミジとしては不本意だが、モミジが持つ世界花の加護は、力の成熟の過渡期に当たる『進化』である。『開花』の祝福を受けているナデシコには敵わず、また彼女の剣は、

この四人の中でなら間違ひなく害虫に対して最強だろう。

「だからといって、ナデシコさんが一人だけで行く理由にはなりません。そのお話、私たちも加えさせていただけませんか？」

しかし、ナデシコも自分たちの大切な仲間だ。どれだけ彼女自身が「開花」の加護で強くとも、危険な場所へ一人で向かわせることを肯定できない。彼女が平気で言う無茶を、自分たちが少しでも和らげることができればならと、モミジはナデシコに言った。

「……一人は……ダメ」

サボテンも同意見らしい。モミジは決断していた。ナデシコが泉へ向かうと話してから、自分の成すべきことを。

武者修行の旅は後回しだ。害虫の仕業かもしれない脅威を解決するのが、自分たち花騎士^{フラワーナイト}だ。どんな場所においても、己の剣を振るうことを厭わない。

「協力させてください。ナデシコさん」

「モミジさん……？」

彼女の小さい右手を両手で掴み、思わず胸元に寄せる。

「花騎士^{フラワーナイト}は助け合いです。ナデシコさんとは、前に一緒に戦ったこともあるんですよ？ 仲間を、絶対に見過ごすわけにいきません」

「えっ……！ でも、お気持ちは嬉しいのですが、さつきも言った通り、私たちのように、桃

源郷〃の人でないと……」

「だったら！ この異変が解決するまで、桃源郷〃で厄介になりましょう」

「ええっ!?」

「本気……モミジ……?」

「ええ。さあ、この住人になるにはどういう手続きをすればいいんですか？ 騎士団を抜ければよいのでしょうか。できれば風俗街の働きだけは避けたいのですが、力仕事ならいくらでもやりますよ」

その答えは予想外だったらしい。

特に目立つオトギリソウの驚きようで、耳が痛くなる。モミジはそれすら構わず続けた。

「……冗談はここまでしておきましょう。でも、どんな手を使っても、私は困っている仲間を見捨てておけません。もし害虫の仕業で水源が脅かされているのなら、私たち^{フラワーナイト}花騎士はそれを解決する義務がありますッ！ こうまで関わった以上、私は退くつもりは無いですから」

「モミジさん……」

「コレが今の私の、一番したいことなんです」

真摯に、正面から訴えかける。

モミジの言葉に心を動かされたのか、ナデシコは何も言えずに見つめ返すことしかできていない。

「うん。もちろん、私も力、貸す」

「サボテンさん……！ でも、これは私のわがままです。付き合ってもらって良いんですか？」
「モミジが言い出したかなんて、関係ない。私は、私の意志で友達と……この綺麗な場所を、守りたい。この手の届く場所なら、どこだって、誰だって。そのために、花騎士フラワーナイトに、なった……わたしにできることなら、なんでもする」

彼女の訴えは静かだ。しかしその内側に秘めた情熱は誰よりも熱いと、この場の誰もが知っている。人々の命を守るために鍛え抜かれた拳で、誰かを守るならば、と。

サボテンの言葉が、決意を物語っていた。

「ナデシコちゃん！ モミジさんたちが来てくれるなら私もついていく！ 私一人だけだと足手まといなら、三人でついていけば問題ないよねッ！」

「えっ、ええっ？ それはそうかもしれないませんが……！」

「もう言っても聞かないよ！ 絶対ナデシコちゃんを一人にさせないから！」

オトギリソウはナデシコの両手を湯の中から拾い上げて訴えかける。

それを受けたナデシコはあっけにとられた顔をした後に、小さくため息を吐いた。まるで、しようがないと言わんばかりに。

「……どうも、私の負けのようですね……この雰囲気じゃ、断つても黙って付いてきそうじゃないですか、みなさん」

「たとえ追い出されても、意地でもここに残るつもりです。もちろん、桃源郷の事情まで、必要以上に踏みいるマネはいたしませんが……その場所に入れなくても、できるところまでついていく、といったこともできるはずですよ」

「……わかりました。じゃあ、お風呂から出たら着替えてください。お昼からすぐ出られるようにしましょう。いつでも害虫の相手ができるようにしておいてください」

モミジたちは思い思いに頷き、露天風呂を後にする。体を拭きながら、モミジは自分にできることを思い描く。

団長に命じられた任務じゃない。自分で考えて決めたこと。

だから最後まで貫き通したい、自分が一番望む、結果になるまで。

モミジはそう信じて止まない。体についたお湯をタオルで拭き取り、インナーを身につけて、その上に着慣れた戦装束を身につける。そして同じく戦装束となったサポテンとともに借りた部屋へと戻った。

——私、頑張るよ。お姉ちゃん。

亡き姉に向けたその言葉は、どんな困難が相手でも切り拓いてみせるという、モミジの意志であり決意の表れだった。